

きた妻子の顔はまっ黒で、泥とほこりで見るすべもなかったが、子どもがとびつき、涙をポロポロ落した。ほんとうに嬉しかったことと思う。いまでも当時の光景が四十年過ぎた今日でもまぶたにやきついている。

東京の生活（昭和二十一年暮より今日まで）

半年ほどふるさとに住んだが、こんごの生活、設計方針を東京と定め、上京就職はしたものの、衣食住に困り、親子三人で四畳半一間を借用し、なんとかしなくてはならないと思ひ、当時は焼野原で空き地が多く、すこしの土地を借用して妻子と休日を利用して、開墾整地をしてバラック（木材二寸五分、屋根はトントンぶき）をつくった。すき間風も素通りで、寒さもことのほか身にこたえ、家族共ども病におかされ、入退院の連続であつたが、現在ではなんとか病魔も去つた。一時はわが家はどうなるかと案じた。十数年後に、バラックも建てかえることができた。しかし借財にいたつては返済中で、いつになつたらわが家となり、安らかな夢を見、楽しい思いができるであろうか。いつまでもいつまでも平和でありたいと祈念しているものである。

引揚記

沖繩県 池宮城 幸 興

二・二六事件の発生で、国内がまだ騒然としている昭和十一年三月に、私は那覇商業を卒業して、地元の銀行に勤めました。十二年には日支事変勃発、十三年、十四年は張鼓峰事件、ノモンハン事変とソ連との紛争が相次ぎ、日本が危急存亡の立場にあることが身に沁みてわかりました。

私は十四年の徴兵検査で第一乙種に合格しましたが、補充兵に回されました。銀行に勤務してから四年後の十五年三月、かねて転職を希望して申込みをしてあつた満州国新京市（現、中華人民共和国吉林省長春市）の金融合作社連合会（満州国の農村金融機関で農事合作社と合併、四月から興農合作社中央会となる）から採用と赴任を促す通知が来しました。当時、満州は日本の北の生命線とも言われておりましたので、このまま、安穩の日々を沖繩で過ごしているわけにはいかないと焦燥感が、私

を満州に駆り立てました。

両親、弟妹の六人を沖繩に残して、二十二歳になったばかりの私が一人で満州に旅立って行くことには、私自身も内心強い不安とためらいがありましたので、ましてや、残る側の立場にある人たちの不安は大きく、容易に同意は貰えませんでした。しかしながら一補充兵の私に召集令状がくるのは時間の問題という環境下でありましたので、私は、せめて應召までの短い期間でもよいから満州で働かせて欲しい、と泣いている両親に強く訴え続けて、ようやく同意をとりつけることができました。丁度五十年前のこんなことが、昨日今日のように思い出されます。

私の満州行きが決まり、十五年三月下旬に常夏の沖繩から任地の新京へ海路大連経由で赴任しました。当時としては珍しく、満州の門戸大連と那覇間には三角港（熊本県）を中継地にして、千屯そこそこの大阪商船の慶運丸という小型貨客船が月に三回程度定期的に就航しておりました。貨物は、大連から大豆粕、三角港から木材、那覇からは樽詰黒砂糖を積んで、相互にパーター取引を

しているとのことでした。慶運丸は、少人数旅客も乗せましたので、私はこの船で黄海の荒波を越えて沖繩から大連まで乗換えなしに直行ができました。那覇・大連間の船賃は食費込みで十円前後であったような気がします。

こうして私は満州に行き、家族は沖繩に残って五年が経過しました。昭和二十年の敗戦を、私はソ連進駐かの混乱を極めた新京で妻と一歳二歳の年子とともに、又、日米地上線の砲火をくぐって生き抜いた家族は、米軍占領下の壊滅した沖繩で、それぞれに迎えました。昭和十九年半ばころからは音信が途絶えたためお互いに安否を確かめる術もありませんでした。

沖繩で、十三歳の末妹が十九年八月に疎開船対馬丸に乗り、米潜水艦の電撃を受けて多数の学童等とともに沈没、遭難死していたことも知りませんでした。又、十九年に沖繩から新京の興農合作社中央会に就職、翌二十年五月、山口の陸軍通信学校への入学通知を手にしながら十九歳で繰り上げ現役入学に応じて東満国境方面に出征した弟が、敗戦の年の十一月牡丹江陸軍病院で戦病死し

ていたことも、満州から引き揚げ後知り得た事でした。

私は昭和十八年三月に新京で福島県出身花井澄子と結婚し、十九年に長女、二十年に長男が新京で誕生しました。妻の父は満州拓殖公社に勤務、十二年から八人の大家族で新京に生活していました。妻が十五年三月に私と同じ職場に入社していたことは課が別だったのでしばらくは知りませんでした。

話は前後しますが、私が満州にきた次の年の九月に関東軍特別大演習（関特演）で大動員があり、多くの民間人が應召しましたが、中央会から三人に臨時召集令状がきて、そのうちの一人が私でした。職をたて歓呼の声に送られて新京駅から私は北滿の佳木斯陸軍病院に入隊、衛生兵の教育を受けました。ところが、この時の召集はほとんどの人が一か月の教育を終わると、召集解除になり、職場に復帰しました。沖繩でも私のために出征職を揚げていたとこのことを、沖繩引き揚げ後に父から聞かされ恥ずかしい思いをしました。

さて、満州では、戦況の悪化につれて召集も多くなり、二十年六月の根こそぎ動員で在満日本男子のほとんどが

兵役に服したため、満州国の機能は麻痺しました。私は吉林省磐石に應召入隊し、撫順城から山の中を徒歩で鉄嶺に出て、そこからは貨車にもぐるなどして南新京駅に辿り着きました。そこで新京からの脱出疎開に失敗して再び新京に戻っていた妻子や岳父の家族と再会を果すことができませんでした。私は撫順から脱出の時に、どこの街に出るか選択に迷いました。この時は判断次第で妻子と生き別れの可能性があったのです。

二十一年七月新京を離れ、十月佐世保に上陸したが沖繩にも帰れず、福島県の妻の実家の親戚を頼って引揚げました。二十四年三月私達家族四人は、沖繩の家族とようやく元気で再会することができました。私や妻子が混乱の満州から無事引揚げて、沖繩の残った家族と再会できたということは、筆舌に尽しがたい苦難の中での人間の運や、又、多くの知人友人親戚の方々の好意や配慮の賜物であると考えて、祈りたい心であります。